



峠の茶屋



川崎ゆきお

「峠の茶屋はいいですよ」

「時代劇ですか」

「いや、現代劇だが、少し古いかなあ」

「峠にある茶店ですか。ハイカーなどが立ち寄るような」

「山道には違いないが、山歩きが目的ではない。つまり徒歩で立ち寄る人は殆どおらん」

「じゃ、峠などにあるドライブインですね」

「そうそう。山が立ちはだかっておる」

「はい、壁のように」

「山の切れ目があれば、それは川だな。普通はそこに道がある。しかし、それが無い壁のように横たわる山は、その一番低い頂を越えることになる」

「山の頂上ではなく」

「その方が見晴らしがいいですが、山頂に普段用はないでしょ。村と村、町と町を結ぶのが目的なのでな。出来るだけ越えやすい峰の切れ目を選ぶ。これは低い方がいい」

「はい」

「そこは両方の村落との接点でもある。どちらも山向こうに相当する」

「それが何か」

「峠の説明じゃ。ここに市が立つ」

「物々交換など出来そうですねえ」

「まあ、そんな時代ではなくなっても、今はドライブインや喫茶店が残っておることがある」

「たまに見かけますよ。殆ど廃墟のようなレストラン」

「私は、そういう廃墟ドライブイン、特に峠の茶屋が専門でね」

「そこに出ておられるのですね」

「そうじゃ。たまに自販機を動かしてみたり、喫茶店に明かりをともしてみたりする」

「悪いことを」

「たまに茶店の婆さんになったり、峠の犬になったりする」

「峠の犬ですか」

「だから、ドライブインに棲み着いたような犬じゃ。こいつはおとなしい野良が多い」

「はい」

「あなたは、どこに出ますかな」

「僕は遊泳出来なくなった海水浴場や使われていない山の中のスケート場です」

「スポーツ系なんですか、あなた」

「はい、そちら専門です」

当然、二人は人とは少し違う。二匹と言ってもいい。

